



こんぴらさん障壁画の謎

ー若冲・岸岱をめぐってー

【第11章】

岸岱 制作の謎と《陵王図・桜樹太鼓図衝立》

天保15年(1844)5月3日に制作を申し出て、同年6月26日には完成したという早さから、事前に打ち合わせが行われており障壁画制作を予定した代参ではないかという説がある¹。画題と構図は若冲の作品に依拠したとしても、岸岱、有芳、岸光の3名で事前準備なく、およそ2カ月で制作できるのであろうか。

「春の間」「菖蒲の間」「柳の間」の制作だけでなく、有芳は《萩に鹿図》《瀧鷺図・白椿飛鳥図杉戸絵》を制作している(《萩に鹿図》は「天保甲辰夏日有芳藤秀」との款記があるので各室と同時制作である。《瀧鷺図・白椿飛鳥図杉戸絵》は「有芳」の署名のみであるが、おそらく同時制作であろう)。5月29日には岸岱が玄鶴図を献上している²。

前章で紹介した『天保十五年金光院日帳』4月23日の条³に、岸岱来社以前から奥書院の工事を進めており、旅館の手配をしていることが記される。4月25日の条には、岸岱宛に院主が留守で書院も造作中なので宿にてゆっくりお過ごしなされるよう記されており、岸岱来社を把握していたことがわかる。

『奥書院修理工事報告書』によると、上段の間床の障壁画中より発見した板⁴に次のように記されている。

天保十五年辰年四月吉日

奥書院御上だん式三柳の御間御床襖

御張付それぞれ張立申候

讃嘉高松新瓦町中ノ筋北かわ

表具師 松月堂与兵衛

弟子

新長屋 忠次郎

新瓦町 弥五郎

こん屋町 利助



修理札

これが、岸岱の障壁画制作を計画しての事前準備なのか、単に奥書院修理工事で予定していた襖の貼替だったのか判断できないが、岸岱来社以前の4月に床や襖の張立てが行われている。

この時期の金光院がどのような状況だったかという点、第15代別当宥怡(1814~1824)の代から山下家と多聞院の間では院主相続争いが続いていた。宥怡は詩や書、俳諧に通じており国内の文化人が金光院に集まるようになったそう。しかし、隠居した宥怡は下屋敷⁵に移り前官様として待遇され文化人との交際費は多く、金光院の財政を圧迫しているとして問題視されていた。文政12年(1829)には、寺社奉行から今まで金光院だけで扱っていた諸収納を役人も加えて行い、報告するよう命じられ収入の公開と支出の儉約が示された。天保4年(1833)には高松藩、天保5年(1834)と7年(1836)には丸亀藩に拝借金⁶の願いを出している。江戸参府による多額の出銀や天保の大飢饉による歳入減少が重なった折の天保5年(1834)打ちこわしが起こるなど混乱した。天保4年(1833)に高松藩から吉田甚助が金光院に出役され弘化2年(1845)12月まで監督と指導に当たることとなる。宥怡は天保4年(1833)から天保13年(1842)まで賄銀10貫目だけとされ、天保5年(1834)には空き寺の真光院へ移るよう命じられた。吉田の財政の立て直しにより諸事儉約を旨とし収入が安定してきた。第18代別当宥黙(1837~1857)のときに宥怡との関係も改善され、山下家と多聞院の確執も解決したようだ。天保10年(1839)には借財も皆済でき、天保15年(1844)10月朔日、宥黙は御家中一統に対して10カ年間の厳しい儉約によって財政が立て直ったと報告した。以後、明治まで財政事情はある程度安定する⁶。金毘羅は財政難が長く続いたが、高松藩の干渉を受けたこともあり一山の統治体制を確立することができた。天保10年(1839)本社⁷の屋根葺替、天保14年(1843)二王門の修理、金堂の寄進事業等の境内整備がすすめられている。組織として安定し財政改善の見通しも立ったであろう天保15年(1844)に奥書院修復工事を計画し障壁画も新しくしたようだ。

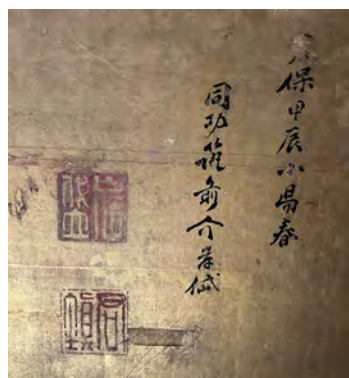
『天保十五年金光院日帳』5月3日の記事に「御書院拝見之上御襖等相認申度様二いたし呉候様申出候事」と記され、これだけをみると岸岱から障壁画制作の申し出があったような印象をうけるが、『天保十五年金光院御用留』5月2日の条⁷に「一、奥書院建修覆二相成候二付御張付絵書替京都御絵師岸筑前介岸岱江相頼始終掛合ハ勘定処手代森藤恒右衛門引請明三日入込可申答也」とあ



り、奥書院建物を修葺することになったので、障壁画の描き替えを金毘羅当局から岸岱に依頼したことがわかる。5月2日に障壁画制作をはじめて依頼したのか、これより以前からやり取りしていたのかは分からないが、依頼された岸岱は奥書院を見て自分のやりたいように描かせてほしいと申し出たということのようである。

天保15年(1844)3月下旬に、別当宥黙は四国順拝に出行し、同年5月26日に帰院⁸。岸岱来社時に別当宥黙は留守であった。この間、5月5日に前官である宥怡が別当代理として参籠している⁹。同年6月26日、岸岱は障壁画制作が終わって数寄屋で御前(宥黙)と面談する。奥書院の修復工事が終わったのは同年10月3日で、『天保十五年金光院御用留』10月3日の条に「此度奥書院御修葺御成就ニ付御家中末々迄家内ニ至迄開地町独礼之家内迄拝見被仰付候事¹⁰」とあり、奥書院の修復が相成ったので御家来中者等に見るよう命じている。

奥書院には岸岱筆《陵王図・桜樹太鼓図衝立》が置かれている。その落款にある「小易春」が「小陽春」であれば天保15年(1844)10月に描かれたことになるという¹¹。



岸岱筆 陵王図・桜樹太鼓図衝立の落款 表



裏

この衝立について『岸岱書翰』(金刀比羅宮文書)¹²に次のように記される。

華帖辱拝見仕候先以寒冷相催候處愈御清榮御起居可被成奉賀□先達而は御上京中毎々得拜眉大慶不少奉存候且又御船中も無滞去月十八日御帰山之由御同慶申候将兼而承り居候清塚碑出来ニ付墨本御惠投被下辱實ニ珍敷事ニ御座候而来人ニ誇申候厚奉謝候
一、御上京節御掛りニ御座候御衝立今便差出申候著之上宜御取計可被下候併是迄者森藤氏より夫々取次御座候故此度も森藤氏□

一、兼而御在京中御山より之御趣意ハ表舞樂裏桜ニ鳥と申候事御面談ニ申候通都合不宜候ニ付樂太鼓ニ相極メ

認申候處中々大造之ものニ而群蝶がならんて来而も此度之辛苦には劣り申候事ニ御座候實ニ骨折ニ御座候尚御熟覽可被下候先ハ右御請旁如此御座候以上

十一月四日

岸筑前介

山下弥一郎様

二白森藤氏へ有芳より委細ニ御文通申候御面会之上宜敷御取計可被下候

これによると、上京中に岸岱と会い10月18日金毘羅に帰山。清塚碑というのは鼓樓の傍に現存し、『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』天保15年(1844)9月27日に「太鼓堂の前に清少納言碑建つ」と記されるもので、岸岱はこれの墨本を贈られたことの礼を述べている。衝立絵に関して、金毘羅当局は表は舞樂、裏は桜に鳥を描くことを依頼したが、都合がよくないため岸岱は樂太鼓を描いたという。大きいもので奥書院の《群蝶図》を描くことより大変で骨の折れる仕事であったと述べている。この書簡により岸岱筆《陵王図・桜樹太鼓図衝立》は天保15年(1844)10月に京で制作され送られたものであることがわかる。



岸岱筆 群蝶図 紙本金地着色 各91.0×181.5



岸岱筆 陵王図・桜樹太鼓図衝立 紙本金地着色 176.3×179.1





ちなみに、この陵王と楽太鼓の図には先行する類例作品がみられる。それは滋賀県蒲生郡日野町に鎮座する馬見岡綿向神社春の例大祭に奉納される大窪町が所有する曳山「龍虎車」の見送幕

下絵であり、文政12年(1829)に岸岱・岸慶親子が制作した。見送幕下絵は岸岱が龍虎を描き、左右胴幕下絵は納曾利に蘭陵王を岸慶が担当している。

この岸慶の下絵と岸岱筆《陵王図・桜樹太鼓図衝立》に描かれた陵王の姿態、楽太鼓の図様は類似しており、岸派内で粉本があったのではないかとと思われる。



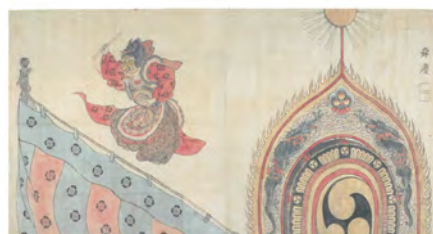
龍虎図見送幕 羅紗地刺繍 文政12年(1829)
185.0×147.0 (滋賀県日野町・大窪町蔵)



左右胴幕



岸岱筆 龍虎図(見送幕用下図) 紙本着色
文政12年(1829) 154.0×126.0 (滋賀県日野町・大窪町蔵)

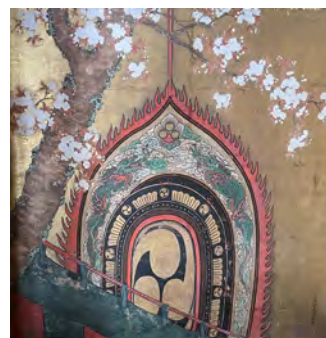
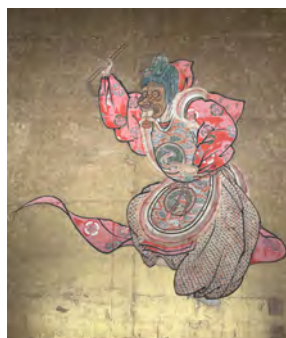
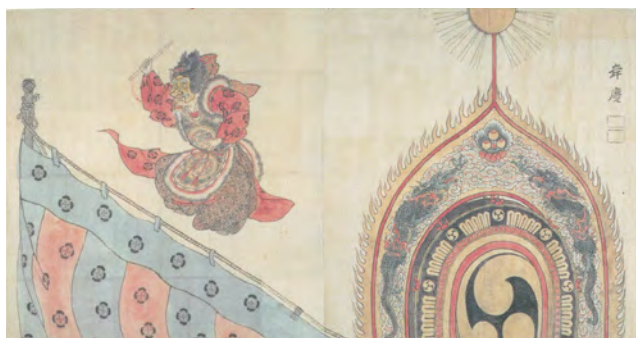


岸慶筆 左右胴幕下図



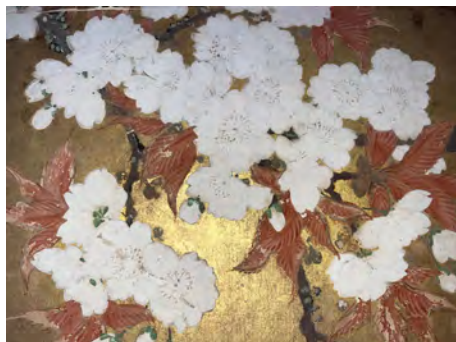
転載(『特別展 写された絵 遺された絵ー岸駒・岸岱 岸派絵画資料をめぐってー』図録(富山市佐藤記念美術館 2012年))

《比較画像》





そして岸慶の下絵には桜が描かれておらず、岸岱は金毘羅の要望に応じて桜樹を取り入れ楽太鼓とともに描いたのである。



金毘羅当局が桜樹を依頼した背景には桜との浅からぬ由縁が関係していると思われる。表書院富士の間にはもと桜の画があり桜の間と呼ばれていた。衝立絵は書院障屏画の一部をなすことから、岸岱に桜と鳥の画を依頼したのもテーマヘリティッジの慣習からといえるだろう。充真院が春の間の図様を桜に小鳥と誤って記していたのも、もしかしたら桜に小鳥が描かれた襖や屏風絵等が金光院内にあったかもしれず、それは撤去された桜の間の障壁画を仕立て直したものかもしれない。古くから象頭山内は春になると桜が咲きほこり、大門を入った参道は「桜馬場」と称され、象頭山十二景に「左右桜陣」として選定されている。明治11年(1878)の御本宮再営にあたり本殿左右に桜樹木地蒔絵壁画や社殿内格天井に桜の木地蒔絵が制作され、平成16年(2004)の遷座祭において社殿内格天井の桜の木地蒔絵は新調された。



桜の木地蒔絵

このように古くから金刀比羅宮において桜は特別な樹木として重用されてきたことがみてとれる。

この岸岱書簡より間もなく天保15年(1844)11月20日、前官様と仰がれた宥怡は遷化した。宥怡は岸岱を送る詩を詠んでいる。

『金光院宥怡詩』

「揮毫常在禁城隈誰識高情不染埃遙憶歸鞍到家後滿庭明月鶴徘徊 送岸岱先生歸京師 先生畜鶴故未句及之 金陵^{宥怡}」¹³

伝岸岱筆《宥怡尊師御影》が琴陵家に伝わっている。

そして、若冲障壁画のうち《百花図》だけがなぜ残されたのか、理由は分かっていない。そのため、特異な作品の希少性ゆえ撤去を免れたのではないか、他の部屋に比べ傷みが少なかったのではないか、または、岸岱が花の写生図を持参しておらず標本も集めることができなかったのではないか等、様々な推測がなされている。

岸岱は百花の図を描くことはできないが、蝶の標本や写生図を合葉文山から借用¹⁴できたので、《百花図》に対応させる形で三の間長押上に《群蝶図》を描いたのではという考察もみられる¹⁵。私見ではあるが、金毘羅当局の意向で《百花図》は残されたと考えている。なぜなら上段の間の制作も依頼していたとすれば、岸岱が断る理由もないであろうし、もし滞在中に何らかの理由で描けなかったとしても寸法を測り京で作画し送ることができたはずである。また再度来社し制作することも可能であったろう。

大正12年(1923)に編纂された『金刀比羅宮崇敬史』¹⁶1巻に「天保十五年 一、五月三日有栖川宮御代参として筑前介岸岱参向す。(史料第十四卷八頁)此時岸岱は門弟有芳、岸光の兩人を従へたりしが、当時奥書院修繕中にて、新しく障壁に画かしめんとして画家を求めつつありし際なるを以て、岸岱の参向を機として之を画かん事を求めたり、爰に於て一行は五月三日より六月二十六日まで滞在して揮毫せるものの即ち現今の奥書院絵画なり、門人有芳の画ける鹿図襖及鶯図花鳥図板戸も亦現存す。委くは宝物史に譲り今之を略す」、3巻に「当宮社務所奥書院障壁の絵画は筑前介岸岱畢世の大作と称せらる。天保十五年(紀元二五〇四)奥書院修繕の擧あり、偶々岸岱有栖川宮御代参として門人有房岸光の兩人を率いて当宮に参向し別当の需に應じて篤志の揮毫する所なり」と記される。



伝岸岱筆 宥怡尊師御影 紙本着色
57.3×171.5(琴陵家蔵)



大正当時金刀比羅宮当局の見解は、奥書院修繕中に、ちょうど有栖川宮の代参で岸岱が来社したので障壁画制作を依頼したということのようである。有栖川宮の関与や事前の打ち合わせについて示す史料は見いだせておらず、どのようなやり取りを金毘羅当局と岸岱が行ったのか詳しい事情は詳らかでない。

⑨ 伊藤大輔「常若の絵画—金刀比羅宮の障壁画」p.24

「有栖川宮の御代参として金刀比羅宮を訪れた岸岱は奥書院の障壁画の制作を申し出た。といってもおそらく事前に打ち合わせは済んでいたであろう。」「むしろ岸岱が登山直後に障壁画制作を申し出、二カ月弱で制作を終えていることからすれば、この度の代参はそもそも障壁画制作を予定した上でのものであったと思われる。この件においては金刀比羅宮は何らかの形で有栖川宮家と深いかわりを持つことになったのであろう。」

⑩ 古田亮「金刀比羅宮書院障壁画の時空間」p.24

「障壁画の制作は岸岱が申し出たもので金刀比羅宮が依頼したのではない。ではなぜ岸岱は奥書院の障壁画制作を申し出たのか。その時、若沖画が痛んでいたとしても、修理不可能なほどの状態ではなかったはずである。というのは、実際若沖画は一部昭和初期まで愛媛の寺に伝えられていたし、『上段の間』の良好な保存状態から推測して他の部屋の障壁画も改修が必要なほどに傷んでいたとは思われない。そして早すぎる完成までの製作日数……。」「この若沖から岸岱へのバトンタッチにはどうも不可解な印象がのこる。3室すべての構想、小下絵、大下絵がはじめて用意され、さらに予め画面に総金地が仕立てられていたのならばともかく、まったくの白紙の状態から完成までに2カ月という時間はあまりにも短い。」

⑪ 辻惟雄「伊藤若沖筆 花丸図障壁画」p.33

「岸岱に新たな仕事を与えるため、破朽を理由に強いて撤去させたという可能性もなくはない。」

⑫ 『金刀比羅宮史料』14巻「天保十五年金光院日帳」5月29日の条に記載あり。

⑬ 西牟田崇生「明治三十三年の金刀比羅宮宝物調査—『国宝さぬき日記』より—」『こと比ら』pp.316-341、5月30日の記事に「柳の間上段脇の入側の障子の鹿ハ有芳慶秀とあり岸岱の門人にして天保度同行せし人のよしこの筆鶴の図ともやの襖張付にも幾辺の鶴をえかけりいとよくかけり」と記されている。伝聞ではあるが、今の山中象堂の場所は以前、「ともや」という旅館があったそうだ。『町史ことひら 2 近世・近代・現代 史料編』琴平町、1997、p.67に掲載「金堂寄進帳」の札之前町をみると登茂屋久右衛門という人物が記されている。『金刀比羅宮史料』14巻「天保十五年金光院日帳」4月23日の条に岸岱一行が下宿する「登母屋」という旅館名が記されており、岸岱、有芳、岸光はこの宿に滞在し障壁画制作に動んでいたのだろう。宿での滞りの御礼に有芳が鶴の画を描いたのではないだろうか。

⑭ 『金刀比羅宮史料』14巻

⑮ ②『奥書院修理工事報告書』pp.43-44。

『金刀比羅宮史料』21巻「奥書院張付中ヨリ出テタル書附」pp.158-159に同様の内容が記されている。

⑯ 『金刀比羅宮史料』3巻に「御下屋鋪 あたご山の中央東の表にあり本坊の御隠居所なり」とある。同19巻『證記』[金光院主之事]宥山(1691～1736)の項「下屋敷 宥典法印御隠居所也少々造作有之也 右下屋敷は土地多聞院屋敷分烟二而有之処有典法印之時分所望被成下屋敷立替り有之裏谷下二而山田畑共被下候松壽院屋敷二付遣候也」

⑰ ⑤『町史ことひら 3』pp.61-62、pp.312-320

⑱ 『金刀比羅宮史料』15巻

⑲ ④松原秀明撰「金毘羅庶民信仰資料集 年表篇」

⑳ ③佐々木礼三「天保十五年金光院日帳より 前別当宥怡の病氣と丸亀藩医尾池紋龍」

㉑ 『金刀比羅宮史料』15巻

㉒ ⑥『特別展 金刀比羅宮と桜 特別公開 桜樹木地蒔絵』図6解説

㉓ 『金刀比羅宮史料』81巻

㉔ 『金刀比羅宮史料』7巻

宥怡が京の都に帰る岸岱へ詠んだ詩であるが、先生(岸岱)が鶴を飼っていたのでこの句を詠んだとある。菱岡憲司「小津久足「松陰日記」について・付翻刻」『文獻探究』第49号、pp.7-25によると、「松陰日記」は小津久足が書いた紀行文で嘉永3年(1850)5月28日に岸岱のもとを訪れた様子が記される。岸岱の人物評に続いて「家づくりもよのつねならず、庭には丹頂の鶴をかひおけり。鳥かふことには妙を得て、この鶴に子をうますは、とし／＼のことなりとぞ。」と記され岸岱が鶴を飼っていたことがわかる。ほかに岸岱から聞いた鶴の生態のこと、岸駒が唐人から得た虎の頭蓋骨を見たこと、岸岱所持の古屋谷石を見たことが記される。

㉕ ①江崎佛三氏「合葉文山 その蝶譜と蝶標本」『九州帝国大学農学部学芸雑誌』9(4)、pp.447-452

江崎氏の論文によると、文山の蝶譜には忠実な写生図、図案化したもの、空想のものが描かれているという。そして岸岱の《群蝶図》にも同じ傾向がみられると指摘している。そうだとすれば、岸岱は文山の標本を借用して《群蝶図》を描いたと伝わるが、標本だけでなく、文山の写生図も借用したのではないかと思われる。

㉖ ⑪羽床正明「若沖筆「垂柳燕図」と金光院宥怡」『こと比ら』64号、pp.160-166

㉗ 『金刀比羅宮崇敬史』1巻、pp.61-62。『金刀比羅宮崇敬史』3巻p.94

参考文献

①江崎佛三「合葉文山 その蝶譜と蝶標本」『九州帝国大学農学部学芸雑誌』9(4)、pp.425-454、1941

②『重要文化財金刀比羅宮奥書院修理工事報告書』金刀比羅宮奥書院修理委員会、1960

③佐々木礼三「天保十五年金光院日帳より 前別当宥怡の病氣と丸亀藩医尾池紋龍」『こと比ら』18号、pp.21-26、1963

④松原秀明撰「金毘羅庶民信仰資料集 年表篇」金刀比羅宮社務所、1988

⑤『町史ことひら 3 近世・近代・現代 通史篇』琴平町、1998

⑥『特別展 金刀比羅宮と桜 特別公開 桜樹木地蒔絵』香川県歴史博物館、2004

⑦辻惟雄「伊藤若沖筆 花丸図障壁画」『國華』1334、p.30-33、2006

⑧西牟田崇生「明治三十三年の金刀比羅宮宝物調査—『国宝さぬき日記』より—」『こと比ら』pp.316-341、2007

⑨伊藤大輔「常若の絵画—金刀比羅宮の障壁画」『金刀比羅宮の名宝・絵画』金刀比羅宮、2004

⑩古田亮「金刀比羅宮書院障壁画の時空間」『金刀比羅宮書院の美 応挙・若沖・岸岱』東京藝術大学美術館、2007

⑪羽床正明「若沖筆「垂柳燕図」と金光院宥怡」『こと比ら』64号、pp.160-166、2009